

## 評価規準と評価基準

前回、授業がうまくいったかどうかは、具体的な評価方法による評価結果の善し悪しによって判断することができるという話をしました。授業内で行われた評価結果が悪ければ、その授業は目標に沿った授業ではなかったということになります。ということは、逆に評価自体が適したものでなければ、正確な判断をすることができない（指導が正しかったかどうかわからない）ということにもなります。指導と評価を一体化させるためには、本時の目標に沿った正確な評価の設定が重要となってきます。

そこで、今回は少しこれまでの話から逸れますが、「評価」について紹介します。「評価」には「評価規準」と「評価基準」とがあるのはご存知かと思います。「評価規準」は、子どもが本時の目標を達成できたかを判断する指標（いわゆる B 評価）を示すものになります。この評価規準が本時の目標に沿った観点で構成されており、評価の指標が適切なものでなければなりません。すなわち、4 観点（知・思・関・技）が明確であり、その観点が目標と一致しておく必要があります。評価規準の作成については、以前紹介した「評価規準のための作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を参考にしたいと思います。次に評価基準の作成についてですが、これは、評価規準の達成状況を段階的に見極めるための基準となります。段階の設定は、A~C の場合や 1~5 の場合と、その時に応じて設定されています。この設定された段階に応じて、子どもの学習到達状況を判断することができます。よって、本時の指導方法や内容が適切であったかどうかは、評価基準を使うことによって「おおむね満足」であるところまで到達できていたかを測ることができればよいこととなります。このように、評価基準を使うことによって、本時の指導が正しかったのかを測ることができます。そのために、評価基準を作成するときは、評価規準に沿って作成する必要があります。すなわちこういうことです。

\* 本時の目標（評価の観点）に沿った評価規準を作成する

\* 評価規準の評価ができる具体的な評価方法（ノート記述など）を考える

\* 具体的な評価方法を用いて評価基準を作成する  
(評価の基準設定は、評価規準が B 段階になるように段階設定する)

\* 評価基準による評価結果から授業の分析を行う

このような視点で評価基準を作成しておけば、この評価基準による評価結果が指導の善し悪しを判断できることとなります。このような、評価基準作成の具体としてルーブリック（rubric）と呼ばれる評価基準表があります。次回は、少しこのルーブリックについて紹介します。

・・・ to be continued ・・・

参考文献：「新しい教育評価入門」西岡加名恵 他著（有斐閣コンパクト）

「評価規準のための作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」国立教育政策研究所